子ども健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Periconceptional maternal diet quality and offspring wheeze trajectories: Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

妊娠前からの母親の食事の質と子どものぜん鳴症状のパターンとの関連

ユニットセンター（UC）等名：コアセンター
サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：Allergy
年：2023　DOI：10.1111/all.15916

筆頭著者名：大久保　公美
所属 UC 名：コアセンター

目的：

母親の食事と子どものぜん（喘）鳴リスクとの関連が示唆されていますが、統一した見解は得られていません。その理由の一つとして、ぜん鳴症状の異質性が挙げられています。そこで、1 歳から 4 歳までのぜん鳴を症状の推移パターンによって類型化し、妊娠前からの母親の食事の質とぜん鳴症状のパターンとの関連を明らかにすることを目的としました。

方法：

1 歳、2 歳、3 歳、4 歳時の 4 時点のうち、3 時点以上のぜん鳴の有無に関するデータを有し、かつ妊娠前の母親の食事やその他解析で使用するデータがそろっている母子 70,530 組を対象としました。そして、混合軌跡モデリングを用いてぜん鳴症状の推移パターンを類型化しました。妊娠前の食事の評価には、食事バランスガイドで示されている目安範囲の下限値をもとに、食事バランススコア（得点が高いほど、食事の質が高い）を算出しました。この食事スコアによって対象者を 4 群に分け、子どものぜん鳴症状のパターンとの関連を調べました。

結果：

1 歳から 4 歳までのぜん鳴症状は、ほとんど症状のない「症状なし」群（69.1%、参照群）、2 歳以降に症状が急増する「幼少期発症」群（6.2%）、2 歳をピークに 4 歳までに症状が消える「一過性」群（16.5%）、そして持続的にぜん鳴症状を示す「持続性」群（8.2%）の 4 つのパターンに分類されました。そして妊娠前からの母親の食事の質が高いほど、「一過性」および「持続性」のぜん鳴症状パターンになるリスクが低いことがわかりました。一方、母親の食事の質と「幼少期発症」パターンとの関連は見られませんでした。

考察（研究の限界を含める）：

ぜん鳴症状のパターンによって類型化したことにより、母親の食事の質は特定のぜん鳴パターンに関連していることが示唆されました。幼少期発症パターンと関連が見られなかった理由の一つとして、2 歳以降のぜん鳴が急増していることからウイルス性気道感染症など他の要因がより強く関連している可能性が考えられます。なお、本研究は 1 歳から 4 歳までのぜん鳴の症状パターンを類型化しており、それ以降の症状の推移パターンは不明です。

結論：

妊娠前から栄養バランスがとれた質の高い食事は、幼少期における子どもの特定のぜん鳴症状を緩和する可能性が示唆されました。